

『南都名所記』についての一考察 —山形県立博物館教育資料館所蔵本の資料性—

Investigation report on "NANTO MEISHOKI" documents of Yamagata Prefectural Museum possession

郡 千寿子*

Chizuko KOHRI*

要 旨

山形県立博物館の分館である教育資料館には、近世江戸時代の文献資料が多数保存されている。継続的に行ってきた北東北地域の文献資料の研究調査を背景にして、本稿では『改正絵入南都名所記』について紹介する。現在の奈良、古くは大和や南都とも呼ばれた地域を紹介した地誌資料には、この『改正絵入南都名所記』のほかにも多種多様の資料が存在しているが、それらにも触れつつ、当該資料の価値について検討考察を行った。山形県立博物館教育資料館所蔵の『改正絵入南都名所記』については、『国書総目録』『古典籍文献目録』にも記載がなく、従来まで未見未詳のものであり、紹介することに意義があるだけでなく、東北文化圏における関西文化受容という意味においても、注目すべきものであることを指摘した。加えて、東京都立中央図書館特別文庫所蔵（加賀文庫）の『南都名所記』との比較検討を行い、それぞれの資料の特質について提示した。

キーワード：地域往来、出版文化、山形、南都、地誌

1 研究の方向性について

近世期以降に出版された往来物資料を通して、実生活にどのようにそれらの文献資料が関わっていたのかの具体像を探ることを目的に研究¹⁾をすすめている。往来物は、寺子屋などで手習いのために使用された教科書の類の総称であるが、近世期には様々な種類のものが出版されている。

従来の往来物研究は、教育史資料という側面が大きかったが、人間文化形成に果たした役割や社会に与えた影響など、多くの未開拓課題が残されており、新たな視点からの活用が期待されている。

日本社会の近代化に往来物資料が、大きく関わっていたことが予想されるのであるが、文献資料の基礎的研究をはじめとして、その発掘も未だ十分にはすすんでいない現状にある。そうしたことをふまえて、東北地域の往来物資料調査を通して、近世期の庶民生活の一面や教育的背景について考えてみたいと思っている。

本稿では、山形県立博物館の分館である、教育資料館に所蔵されている『改正絵入南都名所記』に焦点を絞って、文献資料の性格などについて提示してみたい。地誌資料が言語資料としても有用であることについては、京都を題材とした『都花月名所』を紹介した拙稿²⁾において言及したことがある。「江戸」や「京都」の地誌資料に比して、東北所在の「奈良」（当該資料では「南都」と呼称しているが、便宜上本稿では「奈良」の呼称を用いる）の地誌資料は少なく、そうした点からみても、山形において、『改正絵入南都名所記』の所蔵が確認できたことは注目できるのではないだろうか。調査結果を基礎として、今後、地域の教育環境や文化特性などの考察検討につなげてゆきたいと考えている。

2 東北地域における地誌資料の所蔵について

本稿で取りあげる『改正絵入南都名所記』は、現在の奈良、古くは大和や南都と呼ばれた地域の「名所

*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

記」の類³⁾である。「名所記」は、「名所図会」「名所絵図」などとも呼称され、江戸や京都など様々な地域を対象とした文献資料の存在が知られている。近世後期に多く刊行され、地名・名所・寺社などの沿革を解説した、絵入りの通俗地誌といえる資料群である。

弘前市立図書館、八戸市立図書館、岩手県立図書館、秋田県立図書館、酒田市立図書館等で往来物資料の調査を実施⁴⁾してきたが、東北地域において地理科往来に分類した資料群の中で「奈良」を取り上げた名所記は比較的少ないことが指摘できる。

たとえば、弘前市立図書館所蔵資料⁵⁾については、「江戸」を冠した資料は、『江戸浅草図会』『江戸往来』（東都往来、自遣往来の名称もあり）『江戸名所図会』『江戸名所和歌集』『江戸名物往来』『江戸砂子』等十七種を数えている。一方「都」を冠した資料は、『都花月名所』『都洲集』『都荘子』『都鳥考』『都羽二重拍子扇』『都名所車』『都名所図会』『都巡覧記』の八種、このほか「京」を冠した『京の水』『京羽二重』も確認できる。それに比して「南都」「大和」を冠した資料は見当たらない。当時の地域的関心が、江戸や京都に集約されていた傾向をこうした文献の所蔵状況から予想することができると思われる。

近世期は、様々な分野での価値観が多様性をもち、また人々の意識変革が強いられた時期であった。京都や大阪といった上方に文化の中心があった時代から、次第に政治や経済とともに江戸がすべてにおいて人々の注目を集めていった時期である。歴史的な伝統を帯びた京都への憧憬から、都の名所記を希求し、一方で、今まさに活気づいている江戸への憧憬によって江戸の名所記を希求するというように、当時の人々の地域的関心が、東の江戸と西の京都に二分されていたことが想像できるであろう。

秋田県立図書館所蔵資料では、『大和名所集』『南都名所集』の二種が確認できるが、『江戸名所図会』や『都名所図会』をはじめとして、「江戸」や「都」を冠した資料はるかに多い。酒田市立光丘文庫では、『大和名所図会』『大和廻』が確認できた。しかし、「大和」以外の地域に関係した文献資料の方が多数であり、『都名所図会』『都林泉名所図会』などの「都」を冠した資料の所蔵や『河内名所図会』『和泉名所図会』『撰津名所図会』など大坂の名所記も所蔵されていた。

以上のような調査地域においては、「南都」や「大和」に関係した資料が比較的少ないことが知られるのであるが、本稿においては、山形県立博物館教育資料

館所蔵の『改正絵入南都名所記』に焦点を絞って資料の性格などについて紹介してみたい。

3 山形県立博物館教育資料館所蔵本の書誌について

【整理番号】No. 87 8791

【書名】改正絵入南都名所記

【巻冊】一冊

【題箋】なし

【寸法】縦23.0cm 横16.4cm

【丁数】(本文)二十一丁(表紙別)

【表紙】白色で本文と同紙

【成立】宝暦四(1754)嘉永五(1852)改

【発行者】絵図屋庄八(南都大仏西門前)

書名としては、〈図1〉に示したように『改正絵入南都名所記』となっているが、通称として『南都名所記』と呼ばれたようで、『国書総目録』⁶⁾では『南都名所記』として立項されている。後述する、東京都立中央図書館特別文庫室所蔵本も外題の題箋に『南都名所記』と記されている。

注目すべきは、この書名と表紙部分である。山形県立博物館教育資料館所蔵本は、表紙は本文と同紙である。そしてその表紙に直接、題名などが刷られている。出版当時の様相をそのまま反映していると考えられ、正式な書名としては、『改正絵入南都名所記』であったと推測することができるのである。

山形県立博物館教育資料館所蔵本は、〈図3〉に見られるように二十一丁表に「宝暦四」「嘉永五改版」と記載されたものである。これも注目すべき点であり、この改版の文献については、従来知られていないものであった。

当該資料では〈図1〉の表紙写真に見られるように「南都名所記」と記されているが、〈図2〉の表紙裏部分に見られるように「奈良八景」といった表現も記されている。当時は、地名として「南都」だけでなく「奈良」も使用されていたことが知られるであろう。他方、近世期の名所記の例として前述した『大和名所集』『大和名所図会』といった文献からも知られるように「大和」の地名も使われていたのである。

1603年成立の『日葡辞書』⁷⁾の記載を参考に少し検討しておくことにする。「大和」については、古語の剣印が付されて「Yamato. ヤマト(大和)日本の一つの国。また日本全体の意にも解される。」とあり、必ずしも一地域名としての「奈良」と同意でない



〈図2〉(表紙裏・一丁表)

ておく必要があるだろう。次項で紹介する東京都立中央図書館特別文庫室所蔵本も外題は、『南都名所記』と記されていた。この書名は、題箋に記されたものであり、表紙は本文と別の立派な表装であった。表紙に題箋といった形状で残されているが、この東京都立中央図書館特別文庫室所蔵本には、山形県立博物館教育資料館の〈図1〉表紙部分が見られない状態である。おそらく出版当時の様相を継承しているのは、山形県立博物館教育資料館の所蔵本であると考えられるが、両資料の比較などは後述することにし、「奈良」の「名所図会」としての観点から、まずは考察をすすめたい。

山形県立博物館教育資料館所蔵本は、二十一丁表に「宝曆四」「嘉永五改版」と記載されたものであった。このほか、『国書総目録』によれば、「安永三(1774)年」「文化二(1805)年」「文政元(1818)年」「天保十二(1841)年」「万延二(1861)年」刊行の資料も存在する。

このように改版を重ねている文献として、『南都名所記』が目されるものであることは、強調しておく必要があるだろう。奈良の名所記の中でも、これほど改版がなされたものは例がなく、それだけに当時において、より需要度の高い、必要性が認められた文献であったと考えられるのである。

一冊本であり、全二十二丁(表紙含む)という分量の少ない資料でもあるが、そうした比較的小さな文献であったことが、改版を重ねた理由のひとつであった

のかもしれない。大部な著作物は、持ち運びが難しい。また高価であるから、一家に一つ、という状況でじっくりと読書するのにふさわしい。しかし、分量の少ない薄い一冊本であれば、軽いので、持ち運びには便利であり、何度も繰り返し調べたり読んだりするのに重宝する。分量が少なく、薄い資料ということは、安価であったことも予想できる。安価な商品であれば、より多くの人々が手に取りやすく、売れ筋のものになりやすかったとも考えられるのである。

作り手の側からも、分量の少ない書籍であれば版木が少なくすみ、作り直ししやすいものであったといえるであろう。版權も安価で譲り受けやすかったと想像できる⁹⁾。

薄いという形状や安価という金銭的な価値は、必ずしも内容的な価値や資料としての重要性を低めるものではない。十巻本の『南都名所集』といった、百科事典的な大部なものとは、まったく用途が別のものとして、つまり一冊分に名所を凝縮した、縮刷版として、利便性をもつものとして価値が高かったといえよう。何度も改版され、流布した、という事例からも、要求度が高い、需要度が大きい文献資料であったことが推測できるが、長きにわたり、奈良の名所記として、重要な位置を占めていたと思われる。

この名所記を読み解くことは、当時の人々が「奈良の名所」をどうとらえていたか、また、制作者の立場からの「奈良の名所」をどう見てほしかったか、ということにもつながるであろう。実際の「名所」の有り



〈図3〉(最終丁部分二十丁裏・二十一丁表)

様がどうであったか、という事実とは別に、この資料を通して「奈良のイメージ」が形成されていったと思われる。地域のイメージ生成の背景を探る上で、この資料の役割や影響は大きかったものと考えられるのである。

山形県立博物館教育資料館所蔵の『改正絵入南都名所記』は、従来知られていない「宝暦四」「嘉永五改版」との奥付がある資料として、また外題に書名が本文と同紙で直接刷られたものとして貴重であり、注目できる。資料の特徴を知るために、本稿では、東京都立中央図書館特別文庫室所蔵の『南都名所記』についても合わせて比較検討し、ここに紹介しておくことにしたい。

5 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵本について

東京都立中央図書館特別文庫室（加賀文庫）には、『南都名所記』と題する文献資料が、三冊所蔵されていた。それぞれの書誌をここに紹介しておく。

【整理番号】2762

【書名】南都名所記

【巻冊】一冊

【題箋】あり

【寸法】縦22.4cm 横16.2cm

【丁数】(本文)二十一丁(表紙別)

【表紙】クリーム色

【成立】文化二(1805)文政元(1818)改

【発行者】絵図屋庄八(南都大仏西門前)

【整理番号】2763

【書名】南都名所記

【巻冊】一冊

【題箋】あり

【寸法】縦21.5cm 横15.6cm

【丁数】(本文)二十一丁(表紙別)

【表紙】薄緑色(文様入り)

【成立】宝暦四(1754)天保十二(1841)改

【発行者】絵図屋庄八(南都大仏西門前)

【整理番号】2764

【書名】南都名所記

【巻冊】一冊

【題箋】あり(読解不可能)

【寸法】縦25.6cm 横18.0cm

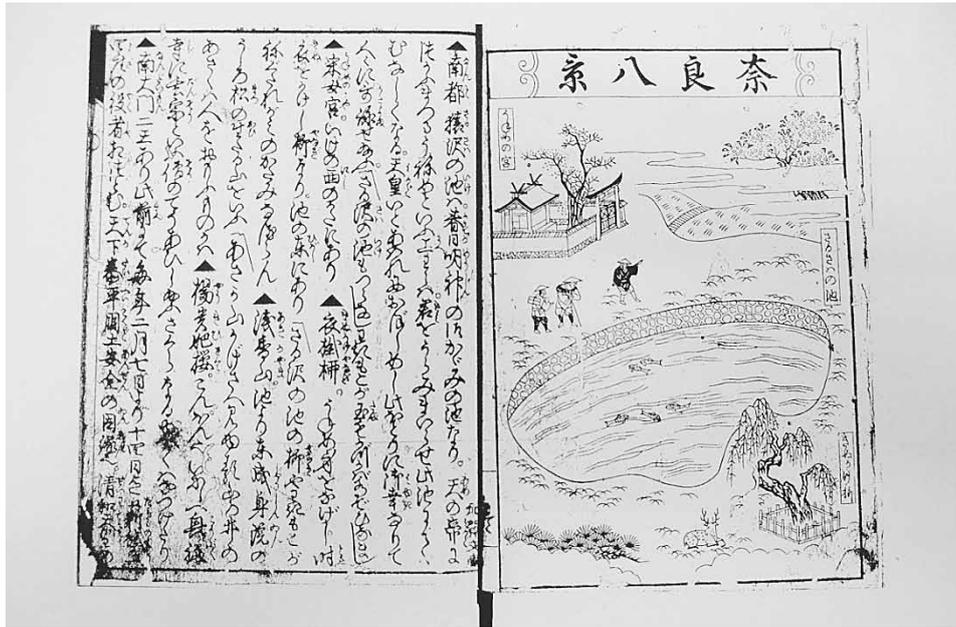
【丁数】(本文)三十二丁(表紙別)

【表紙】青色(後付)元は茶色

【成立】不明

【発行者】不明

以上の三冊について便宜上、①②③と選別して述べていきたい。整理番号2762の①と整理番号2763の②は、大きさや表紙の様相が違っているが、本文の内容は、山形県立博物館教育資料館所蔵資料と同様のもの



〈図4〉東京都立中央図書館特別文庫室所蔵
加賀文庫 2763
『南都名所記』表紙裏・一丁表

と認められ、結論からいえば、版の違う文献資料であることが判明した。

整理番号2764の③は、『南都名所記』との書名であるが、その書名も後に付されたものと思われる。題箋もあるが文字が鮮明でなく書名は読解不能であった。形状は、大本と呼ばれる形態で①②とは違っている。丁数も三十二丁であり、①②の資料に比して分量（丁数）が多い。奈良の名所について記載されたものであり、内容についても確認したが、①②とは別の文献資料と判定できる。この③は本稿で研究対象とした『南都名所記』とは別の文献資料と認定でき、調査対象として取り上げないものとして選別した。ただし、内容的に重複する部分もあり、今後、①②と③の関係については考察検討の必要があるだろう。

6 文献資料の比較

山形県立博物館教育資料館所蔵の『南都名所記』と東京都立中央図書館特別文庫室所蔵資料①②の三本を少し比較してみたい。便宜上、山形県立博物館教育資料館の資料をYと呼び、東京都立中央図書館特別文庫室所蔵資料をそれぞれT①T②と呼称しておく。

Yは、〈図3〉にあるように元となった版が「宝暦四」（1754）で、「嘉永五」（1852）年に改版されたものであった。T②も元となった版が「宝暦四」とあり、「天保十二」（1841）年に改版されたものである。

つまり、YとT②は、時期はずれるものの元となる版は同じであり、T②が作成された十一年後にYが作成されたという関係が知られるのである。

一方、T①は「文化二」（1805）のものが「文政元」（1818）年に改版されたものである。元の版はYやT②より新しいが、改版時期としてはT①より二十三年、Yより三十四年古い版で作成されたものということになる。

本文内容的にはこれら三本間での相違は見られず、振り仮名や漢字遣いについても同様であった。しかし、文献資料の大きさや本文を囲む枠組みの寸法や線など、刷りの違いが確認できる箇所も多い。資料の大きさでいえば、最も大きいものがYで、縦23.0cm 横16.4cm。次にT①縦22.4cm 横16.2cm、最少がT② 21.5cm 横15.6cmとなり、最も新しい文献資料といえるYが縦も横も若干大きいということが確認できた。またそれに連動するかのように本文を囲む枠の線について調査すると、資料の大きさに比例して、T②よりT①とYが若干大きいことも確認した。

版が違うということによるこれら資料の相違は、装丁や枠線といった形状によるものであり、本文内容については忠実に継承されているものであることが知られた。改版といっても内容的な改訂部分はなく、受容に任せて次々に刷り直して再販された人気の文献であったことが想像できるのであった。

内容としては改訂された部分がなく、文字遣いや振

り仮名などは忠実に再現されたものであった。しかし、興味深い相違点をひとつ紹介しておきたい。それは表紙裏部分に描かれた「鹿」の描き方である。三本の資料をよく見比べてみると、鹿の背中の中の模様の描き方に違いがあることが確認できたのである。

YとT②は「宝曆四」年版の同じ版を元として、それぞれ後年に改版されたものであった。文献資料の大きさなどの相違が若干認められるものの、内容的にはYとT②は同一資料と思われた。しかし、絵の部分について詳細に比較すると、Yは〈図2〉に見られるように鹿の背中の中の模様は小さな線で何本も模様が描かれている。T①もこれとほぼ同様に鹿の背中の中は小さな線模様で表現されたものであった。

一方、T②の表紙裏部分の鹿は〈図4〉に示したように少し違った模様なのである。全体の感じは同様であるが、鹿の背中部分に注目すると、小さな線でなく、点で描かれていることが確認できる。YとT②は、元の版を同じくするものの、改版された違う文献資料であるという痕跡が、こうした絵の部分に見られることが知り得たのであった。忠実に模倣しつつも、資料それぞれの個性の表出が確認できたといえよう。

7 まとめにかえて

山形県立博物館教育資料館所蔵の『南都名所記』について、東京都立中央図書館特別文庫室所蔵資料との比較を通して紹介してみた。資料の価値や位置づけについて書誌学的観点を中心に述べてきたが、他にも『南都名所記』から知り得る事象は多岐にわたる。

近世期の名所記の有り様、つまり奈良の名所をどう描いたか、ということを知らせてくれるものであり、版を重ねたこの資料を通して、奈良がどう受けとめられ、地域のイメージを形成していったか、といった観点からも新たなことが見えてくるであろう。

地域資料として大変貴重なものであることはもちろんだが、当時の言語資料として、国語学的な観点からの考察も重要である。たとえば、〈図1〉表紙部分に記された名所に注目してみたい。

たとえば「東大寺」が「タウタイジ」との振り仮名付きで記されている。しかし、古辞書の『文明本節用集』¹⁰⁾には「東大寺」は見られないが、「東寺」に「トウジ」、「東山」に「トウザン」とある。また『書言字考節用集』¹¹⁾にも、「東」に「トウ」、「東寺」に「トウジ」とあり、「東」は「tou」と合音で示されている。一方の『南都名所記』では、「東大寺」の「東」

を「tau」と開音として示していることになる。

他にも「二月堂」に「ニクハツトウ」、「観世音」に「クワンゼオン」との振り仮名が付されている。『文明本節用集』には、「二月」に「ニグワツ」、『書言字考節用集』には、「二月堂」に「ニグワツダウ」と訓読が確認でき、カ行合拗音のうち「クワ」〔kua〕が直音化しない状態で示されている。『南都名所記』は、これら『文明本節用集』や『書言字考節用集』と同様に「クワ（ハ）」と振られており、直音化「カ」でない状態¹²⁾で記されていた。以上に挙げたような語例について整理し、詳細に検証することで、当時の言語事象の表記法についての一端を提示することができるであろう。

山形に残存していた、この未見の、奈良に関する名所記、『南都名所記』の存在意義については、今後も様々な観点からの考察が可能である。従来、地誌資料として扱われてきたこうした文献資料を通して、江戸時代の文字生活や言語環境についての新たな一面を明らかにすることもできるのではないだろうか。残された課題については別稿に譲ることにし、今後も研究調査を続けたいと思う。

注

- 1) 拙稿「弘前市立図書館所蔵「往来物」について—関西文化との関係から—」（『関西文化研究叢書 別巻 往来物の研究 第1輯』、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年3月）、「弘前市立図書館蔵『都花月名所』考—近世期の京都観—」（『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第3輯』、武庫川女子大学関西文化研究センター、2007年3月）、「往来物の「女ことば」について」（『関西文化研究叢書10巻 武庫川女子大学関西文化研究センター、2008年11月）、「近世期における「御所ことば」の記載について—東京大学総合図書館蔵「往来物分類集成」からの報告—」（『弘前大学教育学部研究紀要』第104号、2010年10月）等参照。
- 2) 拙稿「国語資料としての『都花月名所』—江戸時代後期における漢字表記と振り仮名」（『弘前大学教育学部研究紀要』第106号、2011年10月）等参照。
- 3) 林屋辰三郎・森谷剋久他編『江戸時代図誌 第1～6巻』（筑摩書房、1971～1972年）、千葉正樹『江戸名所図会の世界』（吉川弘文館、2001年）、加藤貴「江戸名所案内の成立」（『論集中近世の史料と方法』所収、東京堂出版、1991年）等参照。
- 4) 拙稿「弘前市立図書館所蔵「往来物」について—関西文化との関係から—」（『関西文化研究叢書 別巻 往

- 来物の研究 第1輯』、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年3月)、「岩手県立図書館所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第100号、2008年10月)、「八戸市立図書館旧遠山家所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第102号、2009年10月)、「秋田県立図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第103号、2010年3月)、「酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料一目的と出版地からの分類分析」(『弘前大学教育学部研究紀要』第107号、2012年3月)、「山形県立博物館教育資料館所蔵の往来物資料一目的別分類からの考察」(『弘前大学教育学部研究紀要』第108号、2012年10月)、「山形における江戸時代の書籍流通について一往来物資料の出版地域からの検討」(『弘前大学教育学部研究紀要』第109号、2013年3月)等参照。
- 5) 『国書総目録(第6巻)』(岩波書店、1990年)『古典籍総合目録(第2巻)』(岩波書店、1990年)には「南都名所記」の項目に「文政元版一弘前(釈迦如来梅壇瑞像記と合)」との記載があるが、弘前市立図書館所蔵資料は未確認である。また合冊本であるとのことから、独立した文献資料として扱わないこととしここでは言及しなかった。
- 6) 『国書総目録(第6巻)』(岩波書店、1990年)には「南都名所記」で立項され、別名として「改正絵入南都名所記」とある。多くの資料が紹介されているが、山形県立博物館教育資料館所蔵資料については記載が見られない。
- 7) 『日葡辞書 VOCABULARIO DA LINGOA DE IAPAM 亀井孝解説』(勉誠社、1973年)参照。引用は、土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、1980年)による。
- 8) 西崎亨「描かれた大和の都市空間一地域往来としての名所記・名所図会・名所絵図」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第3輯』、武庫川女子大学関西文化研究センター、2007年3月)参照。西崎氏は「大和」の名所と呼称されているが、本稿では便宜上「奈良」の名所記とした。
- 9) 『日本出版文化史』(書誌学大系1、青裳堂書店、1978年)、長友千代治著『江戸時代の図書流通』(思文閣出版、2002年)、鈴木俊幸著『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)等参照。
- 10) 中田祝夫『文明本節用集 研究並びに索引 索引篇・影印篇』(風間書房、1970年)による。
- 11) 中田祝夫・林洋次郎『書言字考節用集 研究並びに索引 影印篇』(風間書房、1973年)による。
- 12) 佐藤喜代治編『国語史 下』(桜楓社、1973年)300頁によれば、享保12年(1727)に江戸で刊行された『音曲玉淵集』に「くわの字、かともぎれぬやうにいふべき事」とあることが記され、江戸では「クワ」から「カ」へ直音化がすすんでいることが知られる。

付記

貴重な文献資料の閲覧許可をいただくなど、研究にご協力とご助力をいただいた、山形県立博物館教育資料館および東京都立中央図書館特別文庫室の関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

本研究は、平成25年度 科学研究費補助金(基盤研究(C) 課題番号23520541)の研究助成による研究成果の一部である。

(2013. 8. 5 受理)